水垂
史談会報
第 65 号
2025（令和７年）
４月発行

【報告】

―戦後８０年―

「第六垂水丸遭難事故を語り継ぐ」

講演会

― 田尻正彦さんの証言 ② ―

（大正１３年３月３０日生まれ
鹿屋市在住・鹿児島市育ち）

必死で泳ぎ、後ろを向いたら、船の転覆したあたりは１０人くらいずつあちこちで溺れる者同士で掴まり合い、取りすがり合いをしていた。その人々のかたまりが１０か所くらいは見えた。垂水丸はゆっくり進みながら傾いていって、とうとう転覆した。桟橋から１００ｍくらい先に浮いていて、船腹の上に載って助けを待つ人もいた。

手漕ぎの船が２０隻くらい助けに来たが、「若い者は泳げ」と私の横を過ぎて救い上げてはくれなかった。泳ぎは得意だったが、マントが脱ぐことができず体にまとわりついて泳げるものではなかったけれども、必死だった。今でははっきり分からないが、３０ｍくらいだったろうか、なんとか泳ぎ、桟橋まで泳ぎ着いた。兄に借りた皮靴は片方が脱げていた。

私はやっと桟橋に上がり、そのむごい有様を暫く見ていた。そして桟橋を歩いて海岸に上がった。私が夕方帰る前までは垂水丸は浮いていた。海岸には死者を並べてむしろをかけてあった。青年団や婦人会の人たちが大勢来て色々助けてくれた。町の人たちは遠巻きにして、近寄る人はいなかった。

町のサイレンが鳴りっぱなしで騒然としており、海岸では海軍の兵隊さんたちがあちこちで人工呼吸をしていた。海岸は４か所くらいで大量の藁（わら）を焚いてあった。婦人会や在郷軍人たちが私たち生存者を火のそばに連れて行って暖めてさせてくれた。濡れた服で、靴もなく裸足でいたら、船長の奥さんが家で風呂を沸かしてくれて、握り飯を食べさせてくれた。そして服も乾かしてくれた。転覆した垂水丸６号船は天皇陛下が来た時、焼玉エンジンを改造して替えてあり、一番いい船だった。

私は夕方バスで鹿屋に帰った。近所の産婆さんが３人亡くなっていたらしく、その頃は鹿児島から鹿屋に移り住んでいた父は自宅で心配してガタガタ震えて待っていたらしい。

私は１６歳で海軍鹿屋航空隊の工廠に入り、故障をした零戦の修理をしていて、出征前は「溶接の神様」と言われた。工廠は３０００人くらいの工員がいた。いろいろな部品の溶接をしたり、部品の製作などをしていた。零戦は真珠湾攻撃の時は最強だったけどグラマンが出てきてからは下火になり負け始めた。工廠に１６歳から４年いた。２０歳まで。溶接専門。零戦だけで他の飛行機の修理はやらなかった。出征する前は「溶接の神様」と言われた。そのあと兵隊に行った。親父はもともと鹿児島だった。私は天保山の国民学校を出た。兄が鹿屋で建具屋をしていた。復員をして兄を頼って、父は保証人になってひっかかり、財産を失い顕娃に２年くらい行っていた。子どもの頃は鹿児島に住んでいて、城山でミカンちぎりに行って怒られたり、蔓にぶら下がり、ターザンの遊びをしたりした。鹿児島にいる頃、隣に東京で鉄工所をしている社長がいて、東京においでと言われ、高等科を卒業してから１３歳で一人で就職に行った。品川で列車を下りて、柳ごおりを一つ抱えて蒲田の工場まで歩いて行った。紀元２６００年記念の時は蒲田から歩いて二重橋まで行った。２年間くらい働いたが、仕事がきつくて、ちょうど新しく鹿児島から就職してきた人と語り合って、鹿児島に逃げ帰ってきた。帰ってきて１６歳の時、兄に海軍工廠の試験を受けたらと言われ受験したら合格して、工廠に入った。

工廠に勤務していた時、鹿児島の公民館で徴兵検査があった。軍隊への入隊は、垂水丸の事故の後の昭和１９年３月３０日の誕生日を迎えた後で、４月だっただろう。兵役は以前は２１歳だったが、２０歳に繰り上げになり２年間兵隊に行った。熊本の六師団で野砲部隊だった。

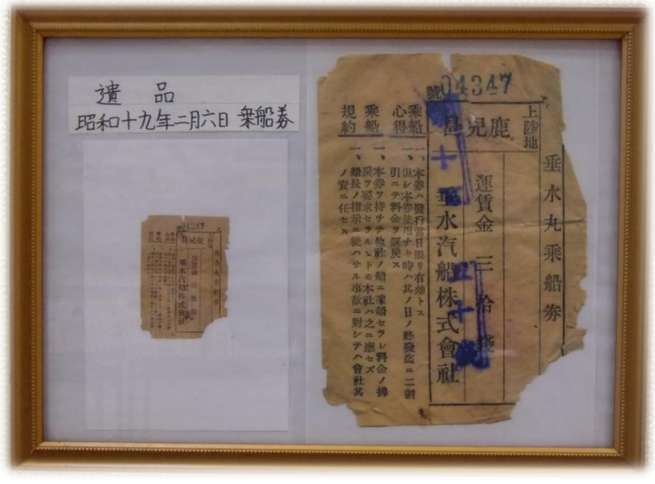
訓練が始まり、４か月たったら中隊長から二階に上がれと言われ、事務所で「茄子の苗」という字を書けと言われ、書いて見せたら字が上手だったからだろう、その日の昼から事務所勤務になった。

一緒に入隊した３６０人はそのあと輸送船で沖縄に行く途中、潜水艦に沈められて全滅し、私一人が生き残りだ。最後まで事務だったので、戦争で鉄砲を打ったことはなかった。

空襲が始まり各部隊は熊本市の郊外の山の中に避難した。空

襲で熊本の街が全部焼けるのを見ていた。その時は熊本城は焼けなかった。神の国だったから負けるとは思っていなかったが、事務所にいたから戦局の情報は刻々と入ってきて、日本が負けるかもしれないとうすうすは感じていた。

終戦の詔勅は整列して聞いた。ラジオの音声は明瞭で敗戦は分かった。みんな死ぬつもりでいたから、泣く者はいなくて、むしろ喜んだ。最後に2階級昇進した。戦争が終わり、1年くらい残務整理に当たり、すべての残留兵に1万円ずつ手当を支給し終わり、最後に22歳で鹿屋に帰ってきた。



戦後は最初兄の建具屋を手伝っていたが、兄に断って大手町でガスタンクと酸素ボンベを備え畳一畳から溶接工場を始めて、田尻製作所として会社を大きくして従業員が40人いた。鉄工会の会長になり、会で戦後アメリカに3回行き、真珠湾を見たりした。工作機械を買うときは地元の同業会社の社長さんたちを東京まで連れて行った。後には300坪の工場を建てた。

兄は輜重隊で仏印まで行ったらしい。私の家内の父親は満鉄にいて、家内は男装をして満州から帰ってきて、花岡の花里に帰ってきた。もとは桜島だったのかもしれない。桜島にまだ親戚がある。

（終わり）

【聴き書き：小手川清隆（大隅史談会理事）】

《垂水の方言と言い回し》　その④

続々：(中俣地区)

- **とんくりっ　すっくかあった・・すってんころりんと　ひっくり返った。「すっくかえた」は自動詞。「ひっくり返した。」**
- **台風が　ぐりっ　まぎっ来た・・台風がぐるっと、方向転換して曲がって来た。**
- **出っくらめ・・とっとと出て行け。**
- **おや　くわべらで走いぐらがおせかった・・おれは偏平足だったので、かけっこが遅かった。「くわべら」は偏平足のこと。**
- **じさん　ばっばん　おっかん・・爺ちゃん、ばあちゃん、母ちゃん。**
- **狸(だぬ)っわろが　穴(あ)ねいぼったぎい　出(で)っ来(こ)ん・・たぬき野郎が穴に入り込んだきり出て来ない。**
- **まさけんかけなうたんなよ・・いざという時に役に立たないじゃないか。**
- **おどま　つんぶうかぁ下よ・・俺たちは膝から下（下っ端）だよ。「つんぶう」とは膝のこと。自嘲的に使うことも。**
- **しけが　かかった・・または「しっが　かかった」。正気を失った。トランス状態になった。**
- **良かうりがせた・・恵みの雨が降った。慈雨のこと。**
- **ぐわいじゃが・・引き分けである。どっちもどっちである場合にも使う。**
- **あよっこよぉ・・嘆き悲しむあまり、とっさに出てくる感嘆詞**
- **痛ても痛てやねか・・痛いのなんの。**
- **走いぐらんご・・かけっこ。「走いぐら」と同じ。**

（瀬角龍平）

埋もれた文化財に光を！

かなり前から、海潟のローソン付近を通るとき、気になっていた標柱がありました。垂水市教育委員会の名で設置された「臨海庵」。随分ぼろぼろで字も読み取りにくくなっています。垂水市教育委員会が昭和59年に発行した「垂水市史料集（五）　垂水市の文化財」を頼りに探索したのが去年の十一月。ところが、約200メートル歩いて墓地まで行き着いたものの、その先が分からない。地元の詳しい方を紹介していただき、ようやく分厚いかずらのベールのすき間から「垂水の文化財」に載っていた写真の仏像を発見！（写真右）しかし、何年も放置されていたようで、倒木やかずら、雑草におおわれて、まさにジャングル状態。全体像が全く見えない！　「続きは草が枯れてから。」と考え、その日は撤退しました。

年が明け、冬が過ぎ、灰が降りそうになかった4月3日。一念発起して、何年分かの薮をはらい、仏像と層塔に太陽の光をあてることができました。薮はらいをしてみると、なぜか層塔が仏像の前に設置し直してありました。（写真左）「だれが？」「なんのために？」は、今のところ不明。他にも五輪塔や無縫塔もあったとの記録があるので、今後手を入れることができたらと思います。

歴史ある町垂水には、文化財が各所に残っています。しかし、放置され荒れ放題となったり、なかにはどこにあったか場所が不明になったりしているものが、いくつもあるのは、本当に残念です。手遅れにならないうちに、計画的に整備していけたら、後世への贈り物になるのではないでしょうか。

（古場昌彦）

「史談会報」の題字が新しくなりました

今号から「史談会報」の題字が変わります。揮毫して頂いたのは、市内上町にお住いの福園剛さんです。福園さんは長年書家として、また高等学校の書道教師として活躍されています。